黃得時全集 9

論述卷三：臺灣文化（下）

江寶釵 主編

黃得時全集 9

論述卷三：臺灣文化（下）

江寶釵 主編

國家圖書館出版品預行編目（CIP）資料

黃得時全集 / 黃得時作 ; 江寶釵編. -
初版. -- 臺南市 : 臺灣文學館, 2012.12
冊 ; 公分
ISBN 978-986-03-5148-4(全套 : 精裝)
863.4 101025319

黃得時全集 9—論述卷三

作　　者／黃得時
發 行 人／李瑞騰
指導單位／行政院文化部
出版單位／國立臺灣文學館
地　　址／70041 台南市中西區中正路 1 號
電　　話／06-221-7201　　傳　　真／06-221-8952
電子信箱／pba@nmtl.gov.tw　　網　　址／www.nmtl.gov.tw

主　　編／江寶釵
編輯小組／呂興昌 施懿琳 陳昌明 陳萬益 陳　韻 黃英哲（筆畫排序）
日文團隊／丁碧玉 吳亦昕 金培懿 徐國章 郭文良 黃得峰 張麗嫺 楊智景
盧秀滿（筆畫排序）
執行編輯／李知灝 許惠玟 許劍橋 謝瑞隆（筆畫排序）
校　　對／李知灝 許惠玟 薛建蓉 梁鈞筌（筆畫排序）
美術設計／黃士豪
排　　版／梁鈞筌 卓佳賢

印　　刷／泰銘照相製版社有限公司
著作財產權人／國立臺灣文學館
本書保留所有權利。欲利用本書全部或部分內容者，須徵求著作財產權人同意或書面授權。請洽承辦單位研究典藏組（電話：06-221-7201）
初版一刷／2012 年 12 月
經銷展售／國家書店松江門市（02-2518-0207）
國立臺灣文學館一雪芙瑞文學咖啡坊（06-221-4632）
五南文化廣場（04-2226-0330）
南天書局（02-2362-0190）
唐山出版社（02-2363-3072）
府城舊冊店（06-276-3093）
台灣的店（02-2362-5799）
啟發文化（02-2958-6713）
三民書局（02-2361-7511）
草祭二手書店（06-221-6872）
G P N／1010103317
I S B N／978-986-03-5148-4

定　　價／全套不分售新台幣 4500 元整

Printed in Taiwan
◎著作權所有 · 翻印必究

臺灣文化（下）

臺灣文學史論集

臺灣文學史　臺灣文學史序說（日文）　6
臺灣文學史　臺灣文學史序說（中文）　29
臺灣文學史　第一章鄭氏時代（日文）　49
臺灣文學史　第一章明鄭時代（中文）　71
臺灣文學史　第二章康熙雍正時代（日文）　91
臺灣文學史　第二章康熙雍正時代（中文）　141
輓近の臺灣文學運動史（日文）　185
輓近臺灣文學運動史（中文）　207
臺灣新文學運動概觀　225

梁任公遊臺考

序文 295
凡例 299
梁任公遊臺考—從〈海桑吟〉看他對臺民的影響 300

臺灣歌謠之研究

緒言 432
第一章　臺灣歌謠的搜集 437
第二章　從唱者本位的分類研究 461
第三章　從形態分類研究 489
第四章　從內容分類研究 521
第五章　與詩經和樂府比較研究 589
結論 613

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

黃得時全集 9

論述卷三：臺灣文化（下）

江寶釵 主編

臺灣文化（下）

臺灣文學史論集

臺灣文學史　臺灣文學史序說（日文）　6
臺灣文學史　臺灣文學史序說（中文）　29
臺灣文學史　第一章鄭氏時代（日文）　49
臺灣文學史　第一章明鄭時代（中文）　71
臺灣文學史　第二章康熙雍正時代（日文）　91
臺灣文學史　第二章康熙雍正時代（中文）　141
輓近の臺灣文學運動史（日文）　185
輓近臺灣文學運動史（中文）　207
臺灣新文學運動概觀　225

梁任公遊臺考

序文 295
凡例 299
梁任公遊臺考—從〈海桑吟〉看他對臺民的影響 300

臺灣歌謠之研究

緒言 432
第一章　臺灣歌謠的搜集 437
第二章　從唱者本位的分類研究 461
第三章　從形態分類研究 489
第四章　從內容分類研究 521
第五章　與詩經和樂府比較研究 589
結論 613

臺灣文學史論集

臺灣文學史　臺灣文學史序說（日文）

一

無所屬時代は別として、和蘭時代の三十八年（西元一六四二～一六六一）、鄭氏時代の二十二年（一六六一～一六八三）、清領時代の二百十二年（一六八三～一八九五）並に改隸以來本年までの四十九年を合せて都合三百十年間の臺灣には、一體、如何なる文人がゐたか、また如何なる作品がこの島から生れたか、それらの作品は、如何なる流れを汲んで今日に及んだか、等について探究する前に、われわれは、まづ臺灣文學史の範圍並にその取上ぐべき對象について一考しよう。

云ふまでもなく、臺灣は絕海の孤島で、昔から一つの纏つた國家をなさず、僅か鄭氏時代の二十二年間を除く外は、或ひは和蘭、或ひは清朝の屬領として明治二十八年我が版圖に入つたものである故、臺灣文學史も目らこれらの政治的影響を受けて、その範圍も極めて廣く、その取上ぐべき對象もまた極めて多岐に亘らなければならぬ。それは一口に臺灣の文學と云つても、何らかの形に於て、本國と非常なつながりをもつてゐるからである。今、これらのことを考へ合せると、臺灣文學史の範圍並に取上ぐべき對象は、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大體、次の五つの場合があらうと思ふ。

（一）作者は臺灣出身であり、その文學活動（ここでは作品の發表並にその影響力、以下同じ）も臺灣に於てなされた場合

（二）作者は臺灣以外の出身であるが、臺灣に永住し、その文學活動も臺灣に於てなされた場合

（三）作者は臺灣以外の出身であるが、一定期間だけ臺灣に於て文學活動をなし、それ以後、再び臺灣を去つた場合

（四）作者は臺灣出身であるが、その文學活動は臺灣以外の地に於てなされた場合

（五）作者は臺灣以外の出身で、しかも臺灣に渡來したこともなく、單に臺灣に關係を有する作品を書き、臺灣以外の地に於て文學活動をなした場合

以上五つの場合の內、眞に臺灣文學史の對象たり得るものは、第一の場合であるが、臺灣は、前にも述べたやうに、改隸前は和蘭や清國、改隸後はずつと日本に隸屬してゐたため、文學もまた本國と密切な關係があり、特に明末清初の頃の文學作品と云へば、殆んば對岸より渡來した役人や文人の手によつてなされたものばかりであるから、第二の場合もまた重要なる對象として考慮に入れるべきである。このことは改隸後の內地人の文學についても同じことが云へると思ふ。さらに第三、第四、第五の場合は、臺灣に

於ける文學活動が極めて短期間であるか、或ひは皆無であるため、他の二つの場合に比べてやゝ重要性を缺くが、しかしこれらの中にも相當立派な作品を殘してゐるので、吾々も全然これを文學史の埒外に置くわけには行かない。そこで臺灣文學史として取扱ふべき範圍は、臺灣の出身にして臺灣に於て文學活動をなしたものと、臺灣以外の出身にして臺灣に永住し、臺灣に於て文學活動を續けたものを主とし、一時的滯在者やその他のものは必要に應じて、これを取り入れるといふ程度に止めて置きたい。領臺以後、內地人の臺灣に於ける文學活動のみ文學史の對象として取扱ふが如きは、やゝ見解の狹きに失し、われわれの取らないところである。われわれは、少くとも臺灣文學史を書く以上は、その文學活動が臺灣に於てなされたならば、原住民たると本國人たるとを問はず、均しくこれを文學史の範圍內に取入れるのを正當なりと信ずるからである。

二

次にある人は、改隸前の文學は、當然清朝文學の一翼に入りまた改隸後の文學は、明治文學の中に包含されるから、殊更に奇を好んで「臺灣文學史」なんぞと獨立して考へる必要はどこにもない、と云ふかも知れない。しかしながら、臺灣は、その種族がらい

つても、また環境からいつても、あるひは歴史から見てもそれぞれ獨特の性格をもつてゐるため、清朝文學乃至明治文學の中に到底見られない獨特の作品をもつてゐるからである。このやうな反對論を唱へるものは、恰も日本文學は世界文學に包含され、南洋史は一部東洋史に、一部西洋史に包含されてゐるから、特に日本文學史乃至南洋史の名目を立てる必要がないといふのと同じである。われわれは、日本文學が世界文學の中で獨特な光を放つてゐると同じ意味に於て、臺灣文學もまた清朝文學乃至明治文學の中にない、獨特の性格をもつてゐると信じてこそ本稿を草したわけである。

然らば臺灣の文學には如何なる特色があるか、われわれは、今、文學を産み出す三つの源泉、卽ち種族（la race）、環境（le milieu）、歴史（le moment）から論を進めて見よう。

（一）種族

臺灣には、原住民たる高砂族の外に、曾つては和蘭人や西班牙人が住み、また鄭氏時代以後には、漢民族が多量に來住し、さらに改隷後には日本人がどしどし渡來したので、臺灣の種族は誠に多種多様と云はねばならぬ。さらに漢民族の中にも福建人あり、廣東人あり、福建人の中にもさらに泉州人あり、漳州人ありで、その性質もまた極めて複雜

である。從つてこれらの種族によつて作られた文學には、明かに二つの特色がある。一つは、本國に對するいはゆる鄉愁の文學であり、他は、異民族間の融和、同化、征服、抗爭の文學である。前者は明末清朝の詩文や領臺後の內地人の歌、俳句に見られ、後者は、全般を通じて見られるが、特に最近强調されてゐる逞しい建設精神や開拓精神の文學はこれに屬するものである。

（二）環境

臺灣は、昔から東瀛、南瀛、蓬萊等の仙山の名稱をもつて呼ばれ、また西曆千五百年代には、當時の葡萄牙の航海者によつて「イラーフオルモサ」（Iluba Formosa）卽ち華麗なる島といふ稱呼を與へられたが、これらは、何れも臺灣の景色が非常に美しいことを賞め讚へたものである。誠にその通りで、臺灣は風光明媚であるばかりでなく氣候も溫暖で、春夏秋冬の別なく奇花異木が到る處に繁茂し、物資もまた極めて豐富で、さながら海上別天地の觀を呈してゐる。これらの風景は、林謙光以下高拱乾、王必昌、陳輝等の「臺灣賦」に詳しく詠まれて居り、また、臺灣府志卷二十の藝文の序にも「當其一葦南來。煙波萬狀。三十六島隱躍舟前。九十九峰參差目下。殆邈焉不知身之在何境也。」

と云つてゐる。さらに原始民族たる高砂族の珍奇な風俗習慣なども加はつて茲にエキゾチズムの文學が產れて來るのである。これらは發して臺灣八景（安平晚渡、沙鯤漁火、鹿耳春潮、雞籠積雪、東溟曉日、西嶼落霞、澄臺觀海、斐亭聽濤）の詩歌となり、張湄の「瀛壖百咏」となり、王凱泰の「臺灣雜詠」となり、佐藤春夫の「女誡扇綺譚」となるのである。

（三）歷史

ここで云ふ歷史は、時代や時世をも意味し、前項の環境を空間的作用と見れば、これは正に時間的作用である。今、和蘭の治世以來、今日に至るまでの三百有餘年間の歷史を振返つて見るに、和蘭から鄭氏に移り、鄭氏から清朝に移り、更に清朝から帝國の版圖に移るといふ風に、それぞれ異つた國家によつて統治されて來た。云ひかへれば、和蘭は歐洲人であり、鄭氏は漢民族であり、清朝は滿洲族であり、日本は大和民族である。これら相異れる民族による政治的支配力は、やがて文學作品の上にも反映して來るのである。例へば、明の遺臣にして清朝に仕へることを快く思はないもの或は改隸當初、帝國臣民たることを欲せずして對岸へ逃げ歸つた文人の中には、かういつたやうな民族的

不滿や政治的不平を吐露した作品を多數作つてゐる。一方また民族意識を超越して、新しい支配者に對し欣然として協力する作品もまた多數あることを忘れてはならない。

以上種族、環境、歴史を通して臺灣の文學を眺めたが、われわれは、これによつて清朝文學にもなく、明治文學にもない、臺灣獨特の文學をそこに發見することが出來るであらう。われわれは、この特色の闡明によつて、やがて來るべき新しい文學の創造に、直接間接、何らかの點に於て役立つものがあらうと信ずるのである。

三

では、斯る特色をもつた臺灣の文學は、如何なる經路を辿つて今日に及んだか、これは、幾つかの時代に區分して考察するのを最も都合よいと信ずる。しかし、この時代區分もまた純粋な文學思潮による區分と、政治力の變遷による區分が考へられるが、臺灣の文學は前にも屢說した如く、政治的影響力が非常に强いので、しばらくこの區分に從つて各時代の特色と重なる作家とその作品を擧げて見よう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com